

ビバハウス 便り No.69    どんなに遅くとも春は必ず来る！

青少年自立支援センター ビバハウス 代表 安達俊子 (Tel 0135-22-0016)

4月27日午前10時半過ぎ、札幌に住んでいる北星余市高校の卒業生から電話があった。

「先生元気かい？僕は元気だよ。札幌は今、風は強いし、その上雲が降っていてすごく寒い。余市の方はどうかな、先生どうしているかなと思って～」と。彼の気遣いの言葉に、ホット心が暖まったものの、4月に入ってこのところずーっと続いている寒さに、私は本当のところ、身体がついていけない状態だ。

目の前の台所の窓を開けてみると、地面は昨年秋の落ち葉のベールで覆われたまま。春一番に咲くれんぎょの樹もまだ固く蕾を閉じている。でもどうだろう、この寒さの中にも3本のチューリップが咲いているではないか！寒さで茎が伸びきれず、ちじこまっているようにも見えるが、それでも必死に小さな赤い花を咲かせている。

格別に厳しい今年の冬を乗り越えて、芽を出し始めたものがほかにもある。昨年7月1日にはじめて法律として成立した「子ども若者育成支援推進法」の本年4月1日施行を前にして、3月29日「(仮称)余市町子ども・若者育成支援協議会」設立準備会が発足したことだ。上記の法律に基づき全国の自治体に設置が求められる、法律の目標を達成するための「地域協議会」の組織、運営を全国の自治体に先駆けて、余市町が定めたのだ。これまで北海道内で唯一余市町のみ、厚生労働省による「若者自立塾ビバ」が設置されていたが、昨年の「事業仕分け」により、この3月末で廃止された。「若者自立塾」の後継組織として、厚生省が新年度から提唱した「基金訓練・合宿型若者自立支援プログラム」を開始するためには、その自治体に「連絡協議会」があることが絶対の条件なのだ。

余市町の支援を必要としているすべての子どもと若者に対し、町を上げて取り組む決意を表明された上野町長をはじめ、準備会発足のため多大な努力を尽くしてくださった民生部長さんなどご担当の皆様にも心からの感謝を表したい。

しかしこの長い厳しい冬にしっかりと耐えて、それぞれに蕾を膨らませているのはほかならぬビバの若者たちそのものだ。北星高校やその他の高校への進学、大学受験のための札幌の予備校への通学、地元に戻っての果敢な就労への挑戦とビバの卒業生たちも全力で戦っている。ビバにいる若者たちは、今年、これまでにない形で余市教育福祉村と農場に対して大きな働きが出来た。村にある有限会社余市ふれあい農場のハウス内の除雪にはじまり、ブルーベリーなどの冬囲いのはずし、さらには、10数人で一度にやらなければ出来ない大きなビニールハウスのビニール張りまで、全力で何日も取り組んだ。仁木町の有限会社サンユー農産の本格的な農作業が始まる前に、これだけの農業実習が出来たことは、初めてのメンバーもいるので若者たちにも貴重な体験になったと思う。

今日は金曜日、担当の社会福祉講座の授業で北星に行ったが、ビバからの8人の新入生にもそれぞれの違いが現れ始めた。北星の水が合ったのか、ますますチャームिंगになり軽音楽部のボーカルを務めるもの、ようやく担任になじんだのか「これから早退します」と職員室まで事前通告(?)にくる子など、それぞれの個性を発揮してきたようだ。